

**[A年] 聖霊降臨節第13主日(2021年8月15日)****【旧約聖書日課】創世記 24章62～67節**

<sup>62</sup>イサクはネゲブ地方に住んでいた。そのころ、ベエル・ラハイ・ロイから帰ったところであった。<sup>63</sup>夕方暗くなるころ、野原を散策していた。目を上げて眺めると、らくだがやって来るのが見えた。<sup>64</sup>リベカも目を上げて眺め、イサクを見た。リベカはらくだから下り、<sup>65</sup>野原を歩いて、わたしたちを迎えに来るあの人は誰ですか」と僕に尋ねた。「あの方がわたしの主人です」と僕が答えると、リベカはべールを取り出してかぶった。<sup>66</sup>僕は、自分が成し遂げたことをすべてイサクに報告した。<sup>67</sup>イサクは、母サラの天幕に彼女を案内した。彼はリベカを迎えて妻とした。イサクは、リベカを愛して、亡くなった母に代わる慰めを得た。

**【使徒書日課】****コロサイの信徒への手紙 3章18節～4章1節**

**3**<sup>18</sup>妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい。<sup>19</sup>夫たちよ、妻を愛しなさい。つらく当たってはならない。<sup>20</sup>子供たち、どんなことについても両親に従いなさい。それは主に喜ばれることです。<sup>21</sup>父親たち、子供をいらだたせてはならない。いじけるといけないからです。<sup>22</sup>奴隷たち、どんなことについても肉による主人に従いなさい。人にへつらおうとしてうわべだけで仕えず、主を恐れつつ、真心を込めて従いなさい。<sup>23</sup>何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。<sup>24</sup>あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。<sup>25</sup>不義を行う者は、その不義の報いを受けるでしょう。そこには分け隔てはありません。

**4**<sup>1</sup>主人たち、奴隷を正しく、公平に扱いなさい。知ってのとおり、あなたがたにも主人が天におられるのです。

**「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ****創世記 24章62～67節**

<sup>62</sup>さて、ネゲブの地に住んでいたイサクは、ベエル・ラハイ・ロイから戻って来たところであった。<sup>63</sup>イサクは夕暮れ近く、野原を散歩していたが、ふと目を上げると、らくだがやって来るのが見えた。<sup>64</sup>リベカもまた目を上げて、イサクを見た。彼女はらくだから下り、<sup>65</sup>僕に言った。「野を歩いて、私たちに会いにやって来るあの男の人は誰ですか。」僕が、「あの方は私の主人です」と答えると、彼女はべールを取り出してかぶった。<sup>66</sup>僕は、自分がしてきたことをすべてイサクに話した。<sup>67</sup>イサクは、母サラの天幕に彼女を入れた。彼はリベカをめとり、妻となったリベカを愛した。こうしてイサクは、母の死後、慰めを得た。

**コロサイの信徒への手紙 3章18節～4章1節**

**3**<sup>18</sup>妻たちよ、主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。<sup>19</sup>夫たちよ、妻を愛しなさい。つらく当たってはなりません。<sup>20</sup>子どもたちよ、何事につけ両親に従いなさい。それが主に喜ばれることです。<sup>21</sup>父親たち、子どもたちをいらだたせてはなりません。いじけるといけないからです。

<sup>22</sup>奴隷たち、何事につけ肉による主人に従いなさい。気に入られようとして、うわべだけで仕えるのではなく、主を畏れる者として真心を込めて従いなさい。<sup>23</sup>何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。<sup>24</sup>あなたがたは、相続にあずかるという報いを主から受けることを知っています。主キリストに仕えなさい。<sup>25</sup>不正を働く者はその不正の報いを受けるでしょう。そこに分け隔てはありません。

**4**<sup>1</sup>主人たち、奴隷を正しく、公平に扱いなさい。知ってのとおり、あなたがたにも天に主人がおられるのです。

(新共同訳)

【福音書日課】

マタイによる福音書 12章43～50節

43「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。44それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。45そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになる。」

46イエスがなお群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちが、話したいことがあって外に立っていた。47そこで、ある人がイエスに、「御覧なさい。母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます」と言った。48しかし、イエスはその人にお答えになった。「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか。」49そして、弟子たちの方を指して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。50だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マタイによる福音書 12章43～50節

43「汚れた霊は、人から出て行くと、休む場所を求めて水のない所をうろつくが、見つからない。44それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。帰ってみると、空き家になっており、掃除をして、飾り付けがしてあった。45そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この邪悪な時代もそのようになる。」

46イエスがまた群衆に話しておられるとき、その母ときょうだいたちが、話したいことがあって外に立っていた。47そこで、ある人がイエスに、「御覧なさい。お母様ときょうだいたちが、お話ししたいと外に立っておられます」と言った。48イエスはその人にお答えになった。「私の母とは誰か。私の兄弟とは誰か。」49そして、弟子たちに手を差し伸べて言われた。「見なさい。ここに私の母、私のきょうだいがいる。50天におられる私の父の御心を行う人は誰でも、私の兄弟、姉妹、また母なのだ。」

「汚れた霊のたとえ～イエスの母、兄弟とは」 共観福音書比較

マタイ 12章	マルコ 3章	ルカ 11章/8章
<p>◆汚れた霊が戻って来る</p> <p>43 「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。</p> <p>44 それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。</p> <p>45 そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになる。」</p>	<p>◆イエスの母、兄弟</p> <p>31 イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスと呼ばせた。</p> <p>32 大勢の人が、イエスの周りに座していた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされると、</p> <p>33 イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、</p> <p>34 周りに座している人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。</p> <p>35 神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」</p>	<p>◆汚れた霊が戻って来る</p> <p>11:24 「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。</p> <p>11:25 そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。</p> <p>11:26 そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」</p>
<p>◆イエスの母、兄弟</p> <p>46 イエスがなお群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちが、話したいことがあって外に立っていた。</p> <p>47 そこで、ある人がイエスに、「御覧なさい。母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます」と言った。</p> <p>48 しかし、イエスはその人にお答えになった。「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか。」</p> <p>49 そして、弟子たちの方を指して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。</p> <p>50 だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」</p>	<p>◆イエスの母、兄弟</p> <p>8:19 さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のために近づくことができなかった。</p> <p>8:20 そこでイエスに、「母上と御兄弟たちが、お会いしたいと外に立っておられます」との知らせがあった。</p> <p>8:21 するとイエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである」とお答えになった。</p>	

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・8月15日「聖霊降臨節第13主日」の日課主題は「家族」。福音書日課は、「マタイ福音書」から、主イエスが血縁の家族ではなく弟子たちを指して家族と言われた箇所。旧約日課は、「創世記」から、妻サラの死後、アブラハムが親戚筋から選んだりベカを息子イサクが妻として迎える場面。使徒書日課は、「コロサイ書」から、信仰者の実生活上で家族相互の関係がどうあるべきかを教える箇所。

**旧約日課(創世記24章より)**

・「創世記」は、旧約正典「律法(トーラー)」の第一巻に置かれ、聖書正典全体に一定の方向付けを与えてきた文書。第二巻「出エジプト記」は「創世記」に接続するものとして位置づけられているが、約400年の時代の隔たりを前提としており、その間隙を埋める物語は存在しない。おそらく、正典「律法」編纂時に、「出エジプト記」から始まる「イスラエル正史」を補足する「イスラエル前史」として、当時のオリエント世界(セム語族社会)で共有されていた伝承集から編纂されたのが「創世記」であると考えられる。「アブラハム、イサク、ヤコブ」三代にわたる族長物語が「創世記」の本編で、前半の「アブラハム物語」(12~25章前半)と後半の「ヤコブ物語」(25章後半~50章)に明確に区分されるが、いずれも修辭的な技巧の施された文学作品として完成されている。

・日課箇所は、「アブラハム物語」の中では最後に置かれた逸話で、「イサクの結婚」を描いている。「アブラハム物語」を貫くものは、物語冒頭(12章)で神がアブラハムに告げた祝福に基づく、子孫繁栄(跡継ぎ問題)と土地取得の実現問題である。アブラハムは、75歳で「父の家」を出た時点で、正妻サラ(サライ)との間に子がなく、甥ロトを跡継ぎとして伴ったとされていた。ところが、そのロトがアブラハムのもとを去ったため、アブラハムは家僕エリエゼルに財産を継がせる意思を固める。しかし、神の介入により、まず、妻サラに仕える女奴隷ハガルによって生ませたイシュマエルを実子として得、次いで妻サラによって嫡子イサクを得た。「アブラハム物語」の焦点は、サラの死によって、嫡子イサクが跡継ぎを得られるかという点に移行するのである。

・イサクの妻となるリベカはイサクの父アブラハムの弟ナホルの孫娘として設定されており、イサクとリベカは、従伯父と従姪の関係(いとこ違い)になる。さらに次代のヤコブは、母リベカの兄ラバンの娘二人(レアとラケル)と結婚しており、叔父と姪の関係である。族長物語は、もっぱら親族内で婚姻が重ねられる物語として進行するが、これは徹底されているわけではなく、イサクの異母兄イシュマエルはエジプトから妻を迎え、ヤコブの双子の兄エサウもヘト人から妻を迎えたとされている。これは、「申命記的神学」に立って、正統な

跡取りでは純血主義が守られているとする描き分けであると見ることもできるが、族長らを一種の「王統」として描いていると見ることもできる。王統維持のために親族間(近親間)の婚姻を繰り返した例は、エジプトの諸王朝で知られている。

・リベカはイサクの妻として迎えられ、「母サラの天幕」を継承したと描かれている。遊牧社会では、夫婦家族であっても男女で「天幕」を区別する例が良く知られており、そのような事情を反映する描写に過ぎないかもしれないが、一族の統率における「女主人」の地位の高さを示唆しているのもであるとも言える。族長物語の時代背景は前20~19世紀ごろで、当時のメソポタミア社会(古アッシリア王国、古バビロニア王国)では、王宮運営において王妃が多岐にわたる監督者として振る舞っていたことが知られており、女官に対してだけでなく男性官吏に対しても強い指導力を発揮していたとされる。

**使徒書日課(コロサイ3~4章より)**

・「コロサイの信徒への手紙」は、アジア州(小アジア)の都市コロサイの教会共同体に宛てたパウロ書簡の一つで、テモテとの連名で記されている。「エフェソの信徒への手紙」「フィリピの信徒への手紙」「フィレモンへの手紙」と共に「獄中書簡」として分類されることもある。内容は「エフェソの信徒への手紙」と類似しており、歴史批評の立場の学者の中には、「コロサイの信徒への手紙」を模倣して(パウロの弟子が)「エフェソの信徒への手紙」を作成したとする学説を唱える者もあるが、コンセンサスは得られていない。エフェソもコロサイもアジア州に位置する都市で、「黙示録」が挙げる「アジアの七つの教会」のリストに「コロサイ」は含まれないが、コロサイ近傍の「ラウディキア」は含まれている。ただし、そもそも、「コロサイの信徒への手紙」自体に、書簡が地域諸教会間で回覧されることを前提とした記述がある(コロ4:10)。一つの見方は、同じ地域性を共有する両都市の教会では、パウロから見て類似の問題や課題があると考えられたので、書簡を回覧したり、別書簡であっても内容が類似したものになったと考えることもできる。一方、「エフェソの教会」は、「使徒言行録(18~20章)」が伝えるように、初期キリスト教全体の中でも非常に有力な教会として地位を得始めていたと考えられ、アジア州諸教会で回覧されたパウロの書簡を、特に「エフェソ教会宛」の書簡として整え直して伝承しようとする動機があったであろうことも推察される。

・日課箇所は、実生活上の家族間の相互関係について助言するものであるが、本書簡全体の中では奇異なほど具体的な事象に関する勧告内容となっている。ほぼ同じ内容の勧告・助言が「エフェソの信徒への手紙」にも含まれている。しかし、「エフェソ書」の場合は、特に「夫と妻」の関係を教える中で、これが「キリストと教会」の関係の類比として捉えるべきものとして示さ

れており、また、「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい」(エフェソ 5:21)と明示されているように、「信仰者の家族」であることを前提とした韓国となっている。「コロサイ書」は、そのような内容を含んでおらず、却って「信仰者ではない家族」と共に生活している者への助言・勧告であるとの印象さえある。本書簡では、「エフェソ書」に比して、異教的なものに対する排除の姿勢が強く(コロサイ2章)、実生活において「異教・異論を保持する家族」とどのような関係を築くべきかという観点からの助言・勧告になっていると理解することもできる。

・本書簡には、「偽りの謙遜」と訳されている箇所が2か所(2:18,23)と「謙遜」と訳されている箇所が1か所(3:12)あるが、いずれも「タペイノフロシュネー」という同じ語の訳語で、語義は「卑しい思い／低い思い」であり両義的に訳される。この語は、「フィリピ書」ではキリストの属性について言い表すために用いられており(フィリ2:3)、また「コロサイ書」3:12にもあるように、パウロ神学の中で信仰者の徳性を示す上で重要な用語である。「コロサイ書」では、この信仰者としての「謙遜」のあり方が一つの問いとなっていると考えられ、日課箇所もまた、信仰者として「謙遜」に「家族」に向き合うことを教えようとしているのである。

### 福音書日課(マタイ12章より)

・日課箇所は、「ベルゼブル論争」(12:22~32)から始まる一連の教えの終わりの部分で、ルカ福音書(11:24~26)、また共観福音書(マルコ 3:31~35、ルカ 8:19~21)に並行箇所がある(本資料2頁参照)。  
 ・43~45 節「汚れた霊のたとえ」は、並行するルカ福音書では「ベルゼブル論争」の直後に置かれているのに対して、マタイ福音書では、「木とその実のたとえ」(12:33~37)および「人々が欲しがらるしについて」(12:38~42)が割り込んだ上で、45 節「この悪い時代の者たちもそのようになる」を付加することによって、主イエスの同時代のファリサイ派らに対する批判の枠組みを明示したものとなっている。すなわち、「汚れた霊」や「ほかの七つの霊」は、明らかに、ファリサイ派や律法学者ら主イエスに敵対する人々の隠喩となっており、彼らの振る舞いに対して最大の注意を払うべきことがこの箇所の使信となっている。  
 ・46~50 節「イエスの母、兄弟とは」の場面は、マルコ福音書では「ベルゼブル論争」と一体の逸話として、ルカ福音書では主イエスの弟子集団の様子を伝える一連の逸話の延長線に置かれている。マタイ福音書では、前段の「汚れた霊」を「ファリサイ派ら」と重ね合わせていることを踏まえると、彼らは追い出された「わが家」に「七つの霊」を伴って戻り、その家をひどい状態にしてしまう者たちであるが、主イエスは「わが家」に戻るのではなく、「新しい家」を創造し、そこに「天の父の御心を行う人」を伴って来られるのだと、対比的に描き出そうとしているのかもしれない。

### 来週の誕生日 (8月15日~21日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-204 番「よろこびの日よ」(= I 54)は、19世紀英国教会司祭クリストファー・ワーズワースが1862年出版の讃美歌集に収めた「主の日」の喜びを歌う詞。彼は、詩人ウィリアム・ワーズワースの甥。曲は、ドイツの民謡曲を19世紀米国の音楽家メーソンが讃美歌用に編曲。
- ・こどもさんびか-34 番「キリストのへいわ」は、音大を卒業して学校教師を経た後に献身したカトリック司祭・塩田泉の作詞作曲。コロサイ3:15から着想。
- ・21-373 番「戦い疲れた民に」は、作詞者は英国教会司祭、作曲はボストン大学チャペルの音楽主事。

#### 21-204「よろこびの日よ」

### O Day of Rest and Gladness

1. O day of rest and gladness, / O day of joy and light, / O balm for care and sadness, / most beautiful, most bright: / on you the high and lowly, / through ages joined in tune, / sing "Holy, holy, holy," / to the great God triune.
2. On you, at earth's creation, / the light first had its birth; / on you, for our salvation, / Christ rose from depths of earth; / on you, our Lord victorious / the Spirit sent from heav'n; / and thus on you, most glorious, / a three-fold light was giv'n.
3. Today on weary nations / the heav'nly manna falls; / to holy convocations / the silver trumpet calls, / where gospel light is glowing / with pure and radiant beams / and living water flowing / with soul-refreshing streams.
4. New graces ever gaining / from this our day of rest, / we reach the rest remaining / to spirits of the blest. / We sing to you our praises, / O Father, Spirit, Son; / the church its voice upraises / to you, blest Three in One.

#### 21-373「戦い疲れた民に」

### Behold a Broken World

1. Behold a broken world, we pray, / where want and war increase, / and grant us, Lord, in this our day, / the ancient dream of peace:
2. A dream of swords to sickles bent, / of spears to scythe and spade, / the weapons of our warfare spent, / a world of peace remade;
3. Where every battle-flag is furled / and every trumpet stilled, / where wars shall cease in all the world, / a waking dream fulfilled.
4. No force of arms shall there prevail / nor justice cease her sway; / nor shall their loftiest visions fail / the dreamers of the day.
5. O Prince of peace, who died to save, / a lost world to redeem, / and rose in triumph from the grave, / behold our waking dream.
6. Bring, Lord, your better world to birth, / your kingdom, love's domain; / where peace with God, and peace on earth, / and peace eternal reign.